NIEしもつけ ワークシート

154

小学校高学年向け

年組

（2023年3月26日付・下野新聞26面）

トウガラシ生産倍増狙う

コロナ影響薄れ農家募集

記者リポート

大田原とうがらしの郷推進協

大田原市内のトウガラシの生産農家や製造、販売業者らでつくる大田原とうがらしの郷づくり推進協議会が、2023年のトウガラシ生産農家戸数・栽培面積の倍増を目指している。生産量は日本一を宣言した19年をピークに新型コロナウイルス禍でいったん減少したが、コロナの影響が和らぎ大幅な需要増が見込めるためだ。2月には2度にわたって新規栽培者を募る説明会を開くなど精力的に活動している。（草場和樹）

市内のトウガラシ栽培農家は19年の189戸から、22年には77戸に減少。栽培面積も19年の約18・8㌶から22年は約6・5㌶にまで落ち込んだ。理由はコロナ禍による需要の減少。時短営業などを強いられた飲食店での需要が先細りとなり、それに伴い業務用トウガラシを扱う食品メーカーの注文が減ったためだ。

だが今月13日からマスク着用が個人の判断になるなど、コロナの影響が少なくなるにつれて需要が回復してきているという。同協議会の会員企業で、トウガラシ専門メーカーの吉岡食品工業（山の手2丁目）国産プロジェクトの田代宗一郎係長（38）は「卸先の企業から、国産トウガラシの問い合わせが相次いでいる。生産が追いついていない状況」とうれしい悲鳴を上げる。

こうした状況を受け同協議会は、23年のトウガラシ生産農家を約150戸以上、栽培面積は約12㌶以上とする目標を掲げた。

取り組みの一つとして、3月下旬の種まき時期を控えた2月11、25の両日に、市特産のトウガラシ「栃木三鷹」の新規栽培者募集の説明会を開催し計55人が参加した。「栃木三鷹」は他の野菜に比べて初期費用がかからず、獣害も少ない。参加者からは「どういう地質の畑で栽培できるのか」「稲作の農閑期にできるのか」などの質問が相次ぎ、前向きな声が聞かれたという。

大田原市内で栽培されるトウガラシ。市内の生産農家などの倍増を目指して活動が行われている（吉岡食品工業提供）

さらに、会員の製造、販売業者をはじめ関係機関も協力し、バックアップ体制も強化。吉岡食品工業は営農担当を2人に増員し、月2回を目安に生育状況などを確認する。生産農家同士で交流会の開催やベテラン農家の畑の見学会などを充実させるほか、県那須農業振興事務所も農薬や肥料の使い方などの技術指導を行う予定という。

同協議会の吉岡博美会長（73）は「日本一のトウガラシ産地を再発信し、大田原を盛り上げたい」と意気込んでいる。

設　問

【1】大田原市内のトウガラシ栽培農家の様子を、記事から読み取って表にまとめよう。

	2019年	2022年
戸数（戸）	①	③
栽培面積（㌶）	②	④

【2】問1のような変化が起こった理由は新型コロナウイルス禍による需要の減少ですが、くわしい理由について60字以内で書き抜きましょう。

【3】コロナの影響が少なくなるにつれて、需要はどのように変わってきていますか。

【4】大田原市とうがらしの郷推進協議会は、2023年の目標をどのように掲げましたか。

【5】大田原市特産のトウガラシは何という名前ですか。また、どのような特ちょうがありますか。

出題・監修は佐野市犬伏小藍原正宏教諭